

## 【研究ノート】

## 中世ジェノヴァ商人の心性について

永 沼 博 道

は し が き

中世後期は地中海の時代である。地中海世界は経済的・文化的交流の場として復活し、ヨーロッパの中心的地位を占めていた。地中海の繁栄の果実をまず分かち合ったのは北イタリア諸都市、とりわけヴェネツィアとジェノヴァの両海洋都市国家である。力と富において抜kindでた両都市を14世紀の詩人ペトルカは「イタリアにおける二つの炬火<sup>(1)</sup>」と呼んだほどである。

しかるに、この両都市は、その繁栄の内的基盤もその後の運命も全く異っていた。ヴェネツィアが国家を中心とした集団主義的企業活動によって国際商業上の地歩を固めていったのに対し、ジェノヴァは個人主義的企業活動によってその富を獲得した<sup>(2)</sup>。ヴェネツィアの国家は、強固に揺ぎないものとして細心の注意をもって作り上げられており、ヴェネツィア人は、貴族も平民も国家に対して強い帰属心を有していた。一方ジェノヴァにおいては、国家は市民の利害を集積するものとは考えられていなかった。ジェノヴァ人にとって国家は「避けらるべき敵であり、征服すべき獲物<sup>(3)</sup>」であった。市民は租税を払うことを避け、租税を上げることを拒否した。国家は慢性的な財政危機状態にあり、内部抗争によって弱体化し続けた。18世紀末まで独立を維持

(1) Kedar, B. Z., *Merchants in Crisis*, New Haven 1976, p. 5.

(2) *Ibid.*, pp. 9-10.

(3) Lopez, R. S., "Venice and Genova: Two Style, One Success," *Diogenes* 71 (1970) p. 44.

しつづけたヴェネツィアに対し、ジェノヴァは早くから政治的自立性を失っている。

好対称をなす国家をもちながら、ジェノヴァとヴェネツィアは、地中海の商業活動における二大勢力であった。しかし、ブローデル F. Braudel も指摘している如く、ヴェネツィアは革新の源ではなかった。中世後期の経済活動の革新の担い手は、「トスカナの開拓者的都市」フィレンツェと並んでジェノヴァであった。ジェノヴァは、地中海を越えて中世におけるもっとも活動的な商人企業家を育てた。<sup>(4)</sup> 小アジアのフォーゲアの鉱山を開拓して、媒染剤として貴重な明礬を北西ヨーロッパに輸送して巨富を得たザッカーリア Benedetto Zaccaria は中でも著名な人物であるが、多くのジェノヴァ商人が黒海沿岸地方で活動し、さらにベルシャ、インド、中国にまで交易し、活動空間の広さはヴェネツィアを上回っていた。ジブラルタル海峡を越えて北西ヨーロッパと地中海を直結する航路を開拓したのもジェノヴァ人である。そのような人物のなかで、ヴィヴァルディ兄弟 Fratelli Vivaldi の航海は注目に値する。1271年ギニア海岸を南下して行った彼等はある意味でコロンブスの先駆者であった。途中で消息を絶った彼等は、アフリカを南下、あるいは大西洋を西へ向って東洋との航路を開拓しようとしたものと言われている。ヴィヴァルディはマルコ・ポーロと同時代の人物であるが、両者に対する取扱い方にジェノヴァとヴェネツィア両都市の違いがあらわれている。ヴィヴァルディの企ては公に承認されたものであり、公式の年代記に記載されているのに対し、マルコ・ポーロについては同時代の年代記作者は何も記録していない。<sup>(5)</sup> ヴェネツィアにおいては個人の抜駆け的な行為は望まれなかった。ヴェネツィアにとどまった彼の弟マッテオは大評議会のメンバーに選ばれたのに対して、マルコは偉大な冒険者として遇されることはなかった。

---

(4) Braudel, F., *Civilisation Matérielle, Économie et Capitalisme*, tome 3, Paris 1979, p.105, マクニール W.H., 清水 廣一郎訳『ヴェネツィア』岩波書店, 1974年, 72頁。

(5) Kedar, B.Z., *op. cit.*, p.119.

一方、ジェノヴァ人にとって創意あふれる大冒険は、賞賛に価するものではあっても否定さるべきものではなかった。

ジェノヴァ共和国は、創意に満ちた個人の企業家精神の溢れる都市であった。個人と個人の競争のなかで勝利を得た者が、富と力を獲得した。ヨーロッパが全体としてなお身分制封建社会の中で眠り続けていたのに対し、ジェノヴァにおけるこの資本主義的精神の展開は、たとえそれが封建的農業社会の大海に浮かぶ孤島であったとしても、注目に値する。

本稿の目的は、この先進的なジェノヴァ商人について主として心性の面からスポットライトをあててみようとするものである。もとよりオリジナルな研究といったものではなく、先人の研究に依拠しつつ、全体的な俯瞰図をえようとする試みである。

## I. ジェノヴァ人の個人主義的心性と都市の開放性

ジェノヴァ人の個人主義的心性とヴェネツィア人の集団主義的心性については、既に同時代のイタリアにおいても十分知られていたようである。14世紀のフィレンツェ人サケッティ F. Sacchetti は皮肉をこめて、ジェノヴァ人をロバになぞらえ、ヴェネツィア人を豚になぞらえた。集団でいるロバは一頭が鞭うたれると全部ばらばらになって逃げ、豚は逆に一かたまりとなつて、なぐった人めがけて突進するというわけである。<sup>(6)</sup>

この両都市民のこのような心性の違いは何処に由来するものであろうか。ルノール Y. Renourd は、ヴェネツィア群島の物理的孤立性、土地の水没と建物の崩壊への絶え間ない脅威が全てのヴェネツィア人に団結心、集団意識を植えつけたのであろうと推測している。<sup>(7)</sup> しかもヴェネツィアは地理的には恵まれていた。アドリア海の奥に位置して比較的安全であり、富の源泉

(6) サケッティ、フランコ、杉浦明平訳『フィレンツェの人々』日本評論社、1949、第71話。

(7) Renourd, Y., *Les hommes d'affaires italiens du moyen age*, Paris 1949, p. 82.

であるオリエントに近い位置を占めていた。他方ジェノヴァは、南に向って広く開いたリグリア海に面しており、アラブ人の侵攻を繰返し受けていた。険しい山岳地帯によって隔てられているとはいえ、陸続きのロンヴァルディアからの侵攻も受けていた。ジェノヴァはその発展を武力によってなさねばならなかった。ロペス R. S. Lopez は、ジェノヴァ人の性格、言語、政治生活、事業における厳しきの由来をここに見ている。<sup>(8)</sup>

中世商業活動においてイタリアがまず優位に立った理由の一つとして、土地が狭隘で山岳地帯が多く、それ故に可耕地が少なく、他のヨーロッパ諸地域におけるごとく開墾や領土拡張によって人口増加を吸収し得なかったことが挙げられる。そこで「商業はイタリア人にとってフロンティアであった」<sup>(9)</sup>。この点はとりわけジェノヴァにあてはまるように思える。ジェノヴァは今日でも交通の障害となっているアペニン山脈で囲まれ、リグリア地方全体を見渡しても平野部はほとんど存在しない。ジェノヴァは増加する人口を養うためには海に出て行かざるを得なかった。生存の基盤は海にあった。海への進出は海賊行為と結びついた拡大として始まり、アラブ人に対する略奪行為はこの都市の初期の段階における富の源泉であった。ジェノヴァの個人主義はこのような歴史的・地理的環境のなかからはぐくまれてきたものと考えられよう。

ジェノヴァではコムーネの起源以来、法は出身による特権を認めず、貴族という称号を無視していた。もちろん現実に所得格差による身分の違いは顕著であった。税負担は貧民層に重くのしかかった。しかし少なくとも初期の拡大の時代は、どのような階層の者でも彼の所得を増やす機会に恵まれた。コンメンダ契約は、小銭をもった未亡人を商業活動に引き入れるとともに、<sup>(10)</sup> 企業心に富んだ貧しい若者にも将来の可能性をもたらしめた。あたかもジェノ

---

(8) Lopez, R. S., *op. cit.*, p. 41.

(9) Kedar, B. Z., *op. cit.*, p. 13.

(10) Lopez R. S., "Le marchand génois: Un profil collectif," *Annales: E. S. C.*, 13 (1958) pp. 504-506.

ヴェネツィア人は全て商人という一つの階層に属しているかの如くであった。ヴェネツィアには Mercadante (商人) と呼称される平民の家族が存在したが、ジェノヴァにおいては、Fornarius (パン屋)、Fevrarius (鍛冶屋) 等と呼ばれる人々はいても Mercator (商人) と呼ばれる家族は存在しなかった。余りに多くのジェノヴァ人が商業に従事していたので、「商人」の呼称でもってある個人ないし家族を特定することは無意味であったことによる。<sup>(11)</sup> 聖職者までが商業活動と無関係ではあり得なかった。まさしく《Genuensis ergo mercator》「ジェノヴァ人故に商人」<sup>(12)</sup> であった。

内部におけるある種の平等性は、外部に対しては都市の開放性に結びついた。ジェノヴァの市民となるためには、市民としての義務をはたすことを誓約する以外に何らの制限はなかった。職人組合は、全ての人に平等に課せられる技術審査に合格すれば、外国人にも登録を認めていた。職人のギルドに参加するのに市民であることは要求されず、この点ではイタリアでほとんど唯一の都市であった。<sup>(13)</sup> 外国人は事業のパートナーとしても歓迎された。

ヴェネツィアは北方の商人やツーリスト達を引きつけたが、私生活や海上貿易からは慎重に彼等を引き離していた。ヴェネツィアはあくまでヴェネツィア人のものであり、黒死病による人口激減の時期を除いて、外国人の帰化には厳しい制限が設けられていた。<sup>(14)</sup> ドイツ人商館《Fondaco dei Tedeschi》はジョルジョーネやティツィアーノの絵画でかざられていたが、いわば「金箔の牢獄」<sup>(15)</sup> であった。ジェノヴァ人は、ヴェネツィア人と異なり外国人を特に招き入れることもしなかったが、能力を持った者なら誰であれこぼむことはなかった。この政策は本国だけでなく植民地においても適用された。植民

(11) Kedar, B. Z., *op. cit.*, p. 59.

(12) *Ibid.*, p. 15.

(13) Lopez, R. S., "Venice and Genoa," pp. 46-47.

(14) ヴェネツィアでは外国人が市民権を得るのに最低25年の居住が必要とされた。  
Kedar, B. Z., *op. cit.*, p. 8.

(15) Lopez, R. S., "Venice and Genoa," p. 47.

地においてジェノヴァ人は、ギリシア人、アルメニア人、タタル人その他いかがわしい出自の人物も、宗教上問題のある人々にも市民権を認めた。13世紀初めにロンバルディアと低地地方から流れ込んだ人々には多くの異端者が含まれていたのであったが、ジェノヴァ人は気にとめなかった。彼等のお陰でそれまでなかった毛織物工業を発展させることが出来たからである。アルピジョワ十字軍によって圧迫されていたプロヴァンスの異端者にもジェノヴァは寛大な避難所を提供した。ジェノヴァはまたその歴史のどの段階においてもユダヤ人への暴力的迫害のエピソードをもっていない。<sup>(16)</sup>

## II. 時間に関する心性

時間の価値に目覚めることにおいて、ジェノヴァ人は他の諸都市民に先んじていた。ヴェネツィアの公証人が月日を記入するのみであった時代に、ジェノヴァの公証人は、既に1200年頃から文書が作成された時間を記載していた。<sup>(17)</sup> ジェノヴァにおいて13世紀の全ての公正証書は、時刻の記載を標準的手続行為としていたのである。商業活動の急激な発展を反映して、事業活動は複雑になりペースも早くなった。商人は一日のうちに多くの業務をこなさなければならなくなり、それを明確に区別して正確に記憶する必要が生じた。公証人は、一日のうちに何度も行う証明の事実を記憶するために時刻を記載した。<sup>(18)</sup>

ジェノヴァ人の時間に対する意識の高まりは、商工業活動のなかから生れ出てくる近代合理主義精神の形成において、彼等が一步先んじていたことを示している。実に、近代的な時間概念の出現は、近代合理主義精神の誕生を示すパラメーターであった。近代人、現代人は普遍的適用できる定時法の中で生活しており、時間を直線的に進行していくものとしてとらえている。時

---

(16) Lopez, R. S., "Le marchand génois," p. 512.

(17) Kedar, B. Z., *op. cit.*, p. 10, Epstein, S., *Wills and Wealth in Medieval Genova 1150-1250*, Cambridge Mass. 1984, p. 10.

(18) Epstein, S., *op. cit.*, pp. 55-56.

間に対して高い経済的価値を認めており、時間を厳密に計測する道具としての機械時計が必需品である。しかるに自然のリズムに支配された農民的生活から生まれる時間への観念は、繰返し循環するものである。当然そこからは時間に高い経済的価値を認める考え方は生れてこない。古代ローマ以来のヨーロッパにおいて伝統的な不定時法では、時間は不等間隔の時間であった。一日は日の出から日没と、日没から日の出までに二分され、それぞれ12時間に分かれていた。この場合、一時間の長さは季節により、緯度により異なることとなる。<sup>(19)</sup>

それに対し、近代の定時法では、1日は等時間隔の24時間によって構成される。一日は午前と午後に分かたれ、それにあわせて労働のリズムがつけられる。商人達は時間に価値を見出し、時間から利潤をひき出す。神に属し「金銭欲の対象となり得ない教会の時間」に対し「金儲けにとって絶好の機会となる商人の時間」<sup>(20)</sup>が姿を現わす。ル・ゴフ J. Le Goff は「いたるところ教会の鐘楼に向い合って取りつけられた大時計こそは、時間の秩序において市民共同体運動のもたらした一大革命なのである」<sup>(21)</sup>と述べ、時計の出現に伴う時間概念の変化の革命的意義を強調している。

機械時計の発明と採用は、時間の合理的利用を容易にし、近代的時間概念の発達を導いたのは事実であるが、時間への関心の高まりは技術革新に先行して、中世商業の発達による商人達の意識の中に生み出されていた。ギャンペル J. Gimpel は、西欧で新しい時間尺度への適応が円滑に行なわれたのは、「その心性においてすでに資本家であった商人や銀行家が時計の利益をいち早く理解したのは、彼らが『時は金なり』ということを知っていたか

(19) *Ibid.*, p. 53. ギャンペル, J., 坂本賢三訳『中世の産業革命』岩波書店, 1978年, 187頁。

(20) Le Goff, J., "Au moyen âge: Temps de l'église et temps du marchand," *Annales: E. S. C.* 15 (1960) pp. 422, 新倉俊一訳「教会の時間と商人の時間」『思想』1979年9号, 47頁。

(21) 同上, P. 47。

(22) ギャンペル, J., 前掲書, 190頁。

らである<sup>(22)</sup>と述べているが、ランダス D. Landes もまた「時計が時間計測への関心を生み出したのではなく、時間計測の高まりが時計の発明に導いたのだ<sup>(23)</sup>」と指摘している。このことは、とりわけジェノヴァ人には良く妥当するものと思える。

ジェノヴァに始めて公共大時計が設置されたのは1354年のことであり、それ自体他の都市に比べて比較的早い時期のことであるが、ジェノヴァ人はそれ以前から、日時計と聖務日課をつける教会の鐘によってすでに時間の合理的利用をはかっていた<sup>(24)</sup>。

聖職者に対して神への祈りの義務をはたさせるために定められた聖務日課は、次の七時課より成っていた。

matutinum	朝課	（日の出の3時間前）
prima	1時課	（日の出）
tertia	3時課	（日の出から3時間後）
sexta	6時課	（日の出から6時間後、正午）
nona	9時課	（日の出から9時間後）
vesperae	晩課	（日没時）
completorium	終課	（日没から3時間後）

この教会の聖務日課のためにつくられた教会の時間に従って、労働の時間もまたつくられていた。9時課をつける鐘とともに人々は一日の仕事を終え、休息の時間に入った<sup>(25)</sup>。これはローマの慣習を受けついだものであったが、このような生活のリズムは、商工業の発達とともに市民達の要求に合わなくなっていた。そこで教会は一つの妥協を行った。正午の聖務課を示す *sexta* が中世後期から次第に消えうせ *nona* にとってかわられ、それに応じて *vesperae*, *completorium* もそれぞれ3時間づつくり上げられることとなっ

(23) Landes, D.S., *Revolution in Time: Clocks and the Making of the Modern World*, Cambridge Mass. 1983, p. 58.

(24) Epstein, S., *op. cit.*, p. 53.

(25) *Ibid.*, p. 55.



た。ル・ゴフによれば、仕事をしている人々に合わせて「9時課をずらすことにより、仕事の時間における重要な再分割、すなわち14世紀に確立された半日という概念を創り出した力の存在を十分思い描くことが出来る<sup>(26)</sup>」。1日を昼の休憩時間をはさんで午前と午後に分かつ近・現代の時間の誕生である。

ジェノヴァにおいては、13世紀初めからすでに *nona* が正午を示していた。エプスタイン S. Epstein によれば、13世紀ジェノヴァにおける時刻を記載した数十万の文書には、どれも *sexta* は記されていない。1239年7月3日の皆既日食を伝える短詩では、正午を示す言葉として *nona* が用いられている<sup>(27)</sup>。

空間の開拓者ジェノヴァ商人は時間の経済的価値に早くから目ざめ、時間を無駄に過ごすことを恐れるようになっていた。中世ジェノヴァ人の時間についての心性は、すでに近代人の心性に一步近づいていたと言ってもよいであろう。

### III. 貨幣に関する心性

カルヴィーノ I. Calvino が蒐集・編纂したイタリア民話集に、ジェノヴァに伝わる民話として「何ごとも金しだい」と題する小話が挙げられている。王に勝る富裕さを誇示したある貴公子が、そのために王から難題をかけられるものの才智をもって切り抜け、最後には王女との結婚をもちかけられる筋である。このいかにもジェノヴァらしい小話の王の最後のセリフは「たしかにあなたは、金だけでなく賢い知恵もお持ちだ。どうか、わたしの娘を嫁に貰っていただきたい<sup>(28)</sup>」というものである。ここには富と才覚を尊ぶ

(26) Le Goff, J., "Le temps du travail dans la «crise» du XIV<sup>e</sup> siècle: du temps médiévale au temps moderne," *Moyen Age* 69 (1963) p. 600.

(27) Epstein, S., *op. cit.*, p. 56.

(28) カルヴィーノ, I., 河島英昭編訳『イタリア民話集』上, 岩波書店, 1984年, 第3話。

ジェノヴァ人の気質が良くあらわれている。才知と儉約によって個人の富の獲得をめざす生活態度は当然のこととして受け入れられており、「自らの働きと儉約によって金持になれ」というギゾー Guizot のモットーは、ジェノヴァでは一般的な美徳として確立していた。<sup>(29)</sup>

ジェノヴァ人の質素な生活と儉約は、他国の人々には、極めて「けち」であると評価された。ボッカチオはジェノヴァ人は「お金を欲しがる貪欲な性質」をもっていると信じており、ギリシャの年代記作者は「貨幣のほかには何も愛さないつめたい人間」と表現した。<sup>(30)</sup> 16世紀のイスパニア人は、ジェノヴァ人が客を夕食に招待する時においても嘆いたり、けちけちしていると述べているが、勝れて貴族的精神に横溢していたイスパニア人にとって、ジェノヴァ人の儉約ぶりは、恥ずべき貪欲をして目に映ったであろう。<sup>(31)</sup>

しかしジェノヴァ人の節約は単なる蓄財のためではなかった。ジェノヴァ人の貨幣観においては、貨幣はそれ自体で新たな価値を生み出す財であった。商業金融活動への投資を前提とした近代的貯蓄観を有していた。早くから商業に従事することによって発展したイタリア諸都市においては当然、貨幣のもつ諸機能の重要性は意識されていた。しかるにジェノヴァ人にとって貨幣のもつ意味はヴェネツィア、ミラノ、フィレンツェ等の他の都市にも増して大きかった。これらの諸都市は農業地帯をそれぞれの領域に含んでおり、ある程度まで自給可能であった。しかし既に触れたように、ジェノヴァの支配するリグリア地方において可耕地はきわめて限られており、穀物を中心とする直接消費物資のほとんどを輸入に依存する必要があった。ジェノヴァにおける天然資源の欠乏は、ジェノヴァ人に貨幣こそ唯一の資源であるとの見方を植えつけたのである。<sup>(32)</sup>

(29) Lopez, R. S., "Venice and Genoa," p. 45.

(30) Kedar, B. Z., *op. cit.*, p. 10.

(31) Pike, R., *Enterprise and adventure, the Genoese in Seville and the opening of the New World*, Ithaca 1966, p. 12.

(32) Martignone F., "L'importanza del danaro nella mentalità dei genovesi alla fine del medio evo," *Studi Genuensi* IX (1972) p. 76.

15世紀以降農業や工業へ次第に資本を移動させていったヴェネツィアやフレンツェと違って、ジェノヴァの場合はもっぱら金融資産の貸出しへと向う傾向をもっていた。それも危険を分散させるために細分化された方法で現実性を追求した。危険の分散のためには保険が有効な役割をはたした。公債への投資はジェノヴァ人の好むところであった<sup>(33)</sup>。

ジェノヴァ人が東地中海から西地中海へ活動の主要舞台を移した時、彼等は海の輸送業者としての役割を退き始めていた。15世紀には船の革新をなしとげて<sup>(34)</sup>かってない巨船を建造したが、16世紀には大西洋の争いの舞台には登場してこない。ジェノヴァ人は、イスパニアとポルトガルによる植民活動の背後にあってもっぱら出資者として活動した。実際的な活動にたずさわることなく彼等は新大陸の黄金を手に入れた。手を汚すことなく富を収奪した16世紀はある意味でジェノヴァの黄金時代であった。この時期に作られた大通り Nuova Strada (現在 Via Garibaldi) に立ち並ぶ荘麗な館群は当時の遺産である。

このようなジェノヴァ人の行動様式には、貨幣のもつ力についての強い自覚があった。後の重商主義者達が貴金属貨幣を国富とみなした見方を、ジェノヴァ人はすでに自らの経験の中から学びとっていた。ジェノヴァ人は貨幣を単に個人的な富裕と幸福の源としてでなく、彼等の生存を保証するために、彼等が用意することの出来る唯一の手段として認識していたのである。貨幣を汚らしいもの、蓄財を不道德なものともみなしていた中世キリスト教社会における一般的な貨幣観の範囲から大きく踏み出していた。儉約によって将来の投資のために貯蓄することは社会的義務と考えられており、質素な生活は道徳的義務であった。このようなジェノヴァ人の心性は、近代資本主義精神と一種相通ずるものをもつものと考えられないであろうか。

(33) *Ibid.*, pp. 83-84.

(34) 帆船の技術革新にはたしたジェノヴァ人の役割については拙稿「中世後期地中海海運の革新——帆船時代の到来に果たしたジェノヴァ人の役割」神戸大学・西洋経済史研究室編『ヨーロッパの展開における生活と経済』晃洋書房、1984年、59-73頁。